

長畝ふるさと通信



【2026年5月号】

■ I T 農業

クボタの自動運転田植え機「アグリロボ」の実演機が来ました。人間が乗らなくても機械が勝手に田植えをしてくれます。田んぼの外周をぐるりと一周してマッピングをしてしまえば（一度マッピングしたデータは保存され、来年以降は田んぼの侵入路に機械をもっていけば勝手に田んぼに入って隅々まで田植えをしてくれるそうだ）、あとは人間が苗と肥料などの補充をするだけ。オペレーターいらずで人件費の削減になる。GPSの位置情報から誤差はわずか2～3センチと、熟練のオ



ペよりも真っすぐ無駄なくきれいに植えてくれます（「全面匠植え」と命名されていました）。更に専用のクラウドと連携すれば上空から田んぼの土壌診断をして、自動的に肥料を可変施肥をする機能まで搭載しており、無駄なく肥料施肥ができるという。メーカーの説明を聞くと現実的にはまだまだ改良の余地はありそうですが、人手不足に悩む現場にとってはとても魅力的です。

- 無人の田植え機が田植えをする姿は家にもあるお掃除ロボットに見えます。

わが社には3台の田植機がありますが、日によっては人手がなくフル稼働しない日もあり、無人田植機があれば経験値のない人でも効率よく手配が可能となります。ただしお値段は少々お高い800万円程。約一か月しか稼働しない田植機にそこまで経費をかけてよいものか、慎重に検討しなければならない案件です。

技術の進化と深刻な人口減少で様々な仕事が I T に取って代わる時代が本格的に到来しています。ボクのようなアナログ人間からすると、人間が墮落してしまうのではないかと考えてしまうのですが……。また、これらの技術はすべて兵器開発から派生したもので、便利になる一方で戦争に加担している気がして複雑な気持ちです。



- キャビンに搭載されたパネルには様々な情報が表示され、音声案内までされます。

■ 高温登熟耐性品種 RILX(リルエックス)

新潟大学が開発に取り組んでいる新品種「RILX」の試験圃場を提供しました。近年、夏の異常高温が常態化し、コメの品質低下が問題となっており、日平均気温35℃の環境下でも安定した生育と高品質な品種開発が各地で取り組まれています。新潟大学では既に「新大コシヒカリ」が開発されていますが、RILXはその後継品種として現在研究されています。品種特性は説明を受け



てもチンプンカンプンでよくわかりませんが、昨年秋の食味検査では従来のコシヒカリや新大コシヒカリと比べても遜色ない食味だったと聞いています。全国の品種別作付け割合はコシヒカリが30%を超えており、(2位のひとめぼれは10%以下)圧倒的なシェアを持っています。今後はコメも多様性の時代、嗜好品として食べられるようになるとか……。いつまでもコシヒカリ万能ではないか。期待しています。

■ 12年ぶり佐渡空港

5月19日、新潟空港を拠点とする航空会社「トキエア」が佐渡上空を試験飛行しました。田植えの最中、見たことのない飛行機が上空を旋回していました。2014年に廃港になって以来12年ぶりの飛行らしい。5月28日から佐渡～神戸間をチャーター運航するそうです(50人くらい乗れそうですが、何人からチャーターできるのだろうか)。佐渡空港の滑走路は890mと短く、ジャンボジェット機はおろか、トキエアの飛行機でも搭乗人数を制限して運航するそうで、東京直通便は夢のまた夢。国仲平野の田んぼをつぶして大きな飛行場を誘致して、カジノやリゾートホテルをバンバン立てて、インバウンドをジャンジャン呼び込むというボクの構想は実現しそうにありません。



■ バブルは一瞬で・・・

コメの価格が下がり続けています。2年前5kg5,000円ととんでもない価格だったものが、今では平均3,700円。マスコミは新米が出るまでにもっと落ち込むでしょうと……。JAが3月に公言していた8年産米の最低保証価格1俵23,000円も未だに正式発表されず、このまいうやむやに反故にされてしまいそうです。「足りないから作れ」と言われ「余ってるから価格を下げろ」では生産意欲も湧きませんわ。「儲かる百姓」じゃなきゃ若者には見向きもされない斜陽産業です。支えて下さる皆様だけが頼りの綱です。8年産米もよろしくお願いいたします。